

生をはじめ京大國史研究室の諸先学にたいしてあらためて感謝の意を表したいと思う。

(A5判 五八二頁・図版三九葉 昭和四十年七月 福井県郷土史懇談会) (福井県立図書館内刊) 頒価二・五〇〇円 送料一五〇円 (河音能平)

酒井忠雄著

時の科学としての歴史学

「個と全体との関係といい、行為を取扱うものとしてとらえて来た歴史学の性格は、更にそれらをむすびつける原理を求めている。個と全体の関係の追究は、哲学者の任務であり、行為は倫理学や行動科学が追究するものだ。それらを、即物的、外在的にとらえるのが、自然科学とすれば、歴史学はそれとちがったところに、真の研究領域がある。

それは、個と全体の関係を、行動でとらえるという『時(とき)の科学』としてとらえなおすことである。」(九四―九五頁) 時とは、むしろ物理的な「時間」ではな

く。行動とは、表現であり、叙述であり、他に働きかけることである。働きかけるからには、その基準を、働きかけ、変更し、かえたかどうかの目標・目的におく。ためということをぬいたいかなる行為も、無効である。そしてこの有効性をはかる手段として、時をもち出すのである。

第一部 時の科学としての歴史学、第二部 時の科学としての歴史学・研究ノート、に分れた本書は、前著『歴史教育の理論と方法』(昭和三六年刊)・『日本史学史ノート』(昭和三八年刊)につづいて、歴史学とは何か、どのようにあらねばならないか、と問いかけ、真正面から迫ろうとしたエッセイ集であり、このような内容をもつ「時の科学」としての歴史学のあり方が提唱される。

著者の歎きを待つまでもなく、近時、歴史書の出版ブームといい、歴史専攻学生の急増といい、歴史の文運はいよいよよさかんであるが、歴史学のあるべき姿は、混迷の度を深めている。およそ学問にとって、そのあるべき姿への反省は常に忘れてはならぬことであるにせよ、今日の歴史学界にあつては、その必要はひととき痛感されるの

である。長年にわたって、歴史学教育から史学史へと真摯な努力をつづけられてきた著者が、いま本書を世に問われたことは、まことに時宜を得たものというべきである。本書によって提示された問題の方向を、今後一層深く体系化されんことを切望する次第である。

(B6版 一五八頁 昭和四〇年五月 大明星堂刊 定価三五〇円) (熱田 公)

山岡桂二著

日本近代思想史に於ける

政治と人間

本書の中心テーマは、近代日本における「政治的主体性」がどのように高まり、これとの関連の上に「人間的主体性」がどう開花してゆくかということであり、その指標として、「国民国家意識」が設定される。明治一〇年代、自由民権運動期に政治的主体性の意識が高まり、この政治的自覚を媒介に近代的な人間性の自覚もめばえる。二〇年代、人間個性の自覚に深まり、これと同時に民族の歴史的個性に対する意識を昂揚せしめ、ここに近代的国民(ブルジョアジ